

ドーベルマン日和

国立病院機構鈴鹿病院長 小長谷正明

年に二、三度、日頃とは違い、多少は善行をした気分になり、最後に『雨ニモ負ケズ』をつぶやいてから、声を出す。

「今日はドーベルマン日和であった」

ことの起こりは、ある婦長の転勤挨拶だった。

大柄で長身、目鼻立ちの夫々がくっきりと個性的で、印象の強い人である。たしかに、かつてはダンス競技会のフロアで映えたにちがいない。なおかつ切り口上で行動的、テキパキとした男勝り、自信に満ちたアルファードググループである。つまり、なんでもその場のリーダーになってしまう。将来の自分像を重ねてか、頼もしいと慕う若いナースたちもいた。飼犬はドーベルマン。いかにも彼女のスタイル、ルックスとキャラクターを表している。そのアルファードググループの主従は自転車に綱を引いてよく散歩するそうだが、その港町には僕は足を踏み入れたいとは思わない。

そのドーベルマン婦長が辞令を見せた後に改まった声で、ついてはお願いがありますと言った。珍しく低姿勢である。しかし、ドーベルマンはドーベルマン、彼女のお願いは断るのは難儀にちがいないと、アドレナリンを蓄えながら、話を聞いてみた。

「二年ほど前のナースの研修会で、太平洋に突き出た半島にある在宅看護ステーションの人と会いました。難病で大変な患者さんも多いのですが、どうしてよいか分からないし、頼りになるドクターもいません。なぜか、その病院には整形外科医が二、三人いるだけで、内科も外科も、時には産科までやっているような状態です。話を聞いているうちに、つい脱いでやりたくなりました」

「そんなもの、見たくない」

僕は反射的に口を出した。脱いだ彼女に突き合わされるのは逆セクハラだと、さらに心中で叫ぶ。ドーベルマン婦長は目をキョロッと動かしただけで、なにもなかったように続けた。

「脱いだのは一肌です。うちの若いドクターに頼んで、一緒に訪問診療をはじめました。一、二回行くと、次からはどのドクターに嫌な顔をされます。そこを、なんとかか説き伏せてともかく続けてきましたが、今度の転勤で後が心配です。ついては病院のきちんとした事業として続くように、先生にお願いしたいのですが・・・」

ほら来た。しおらしいドーベルマンなどはいるはずがないと、舌打ちする。

婦長は病名をあげはじめた。筋萎縮性側索硬化症(ALS)、脊髄小脳変性症、T細胞白血病ウィルス性脊髄障害(HAM)、パーキンソン病・・・。難しい病気が次々と並び、僕の胸の底の方から神経内科医としてのプロ意識がもたげてくる。整形外科医ばかりのその病院がギブ・アップしている様が目に浮かぶ。診療各科のなかでも、神経内科の分野が一番難しい。脳などの神経システムの複雑さと、一筋縄ではない込み入った症状、それに原因不明で治りにくい難病が多いことなどで、医学生にもドクターにも敬遠されがちな分野である。

「専門医の助言が必要なんです。私たちの知識も役に立っています。向こうの在宅看護ステーションのナースからは、大変感謝されています」

こうたみ掛けてから、婦長はさらに付け加えた。

「もちろん、こちらからの往診ですので、向こうからは無報酬です。むしろ、交通費は持ち出しになってはいます。それでも、なんと言っても喜ばれておりますので。病院からは車で往復二五〇キロメートル

にはなりますが・・・」

耳を傾けながら、僕の家からだ三五〇キロだと、ふたたび心の中で舌打ちをした。善意からにしろ、遠くの村への在宅医療で、これだけの疾患を抱え込み、全くのボランティアとは大変だ。本来の院内での業務外なので、どの医者も迷惑顔になるのは当然だ。前後を考えずに一途に猪突猛進で、いかにもドーベルマン的である。きっと強い調子で説き伏せてきたにちがいない。今日は神妙なのは、後がどうなのなるのか、のっぴきないのだろう。が、パッションは通じた。一瞬の間を置いてから、はい分かった、行こうと返事した。

数日後、後を引き継いだ太めナースとその海辺の漁村に向かった。遠いですが、途中の景色がのどかで、それに、向こうさんも歓迎してくれますからと、太めナースのキンキン声はややピクニック気味である。前々からこの活動をサポートしていますと売り込んできた療育担当の職員が運転し、訳知り顔にその土地や患者さんのことなどを教えてくれた。

青空の元、鬱蒼とした神宮の御神木の森の道を抜け、真珠の養殖筏が浮かぶ入り江を脇に見て走り、アップダウンとカーヴの道を二時間半もドライブする。太めナースがソプラノでまたさえずる。

「いつも、このボランティア診療の時は天気がいいんです。××日和と言うんです」

婦長の名前を聞きながら、なるほど、ドーベルマン日和かと思った。

その漁村は、虫垂のように本土から突き出た、目的地は文字通りの半ば島のような半島の砂丘にある。東側に太平洋が広がり、この先はグアム島まで何も無い。

見覚えのある病院の脇にある在宅看護ステーションから年配のナースが飛び出してきて、僕に覚えてますかと聞いた。かすかに記憶していた名前を告げると、手を叩いて、笑顔がはじけた。

「まあ嬉しい、覚えていただいていた、ご立派になられて」

厄介半分に思いながらも、難病の訪問診療を受け入れたのは、ドーベルマンが怖かったからではない。二十数年前の学生時代にこの病院で夏休みを過ごしたことがあったからだ。この年配ナースも今よりは瑞々しく、白衣の天使にいくらかは近かった。その頃は、陸の孤島と言わないまでも、ここの辺鄙さはすさまじく、とうとう医者はだれもいなくなり、無医村になってしまった。役場は大慌てであちこちの大学に医者への派遣を依頼したが、どこもなしのつぶてであった。見るに見かねて、僕の大学の内科教室の医局長が職を投げ打って、その院長に赴任してきていた。そのファイトに促されて、卒業したの先輩が研修医として三人も勤めていた。

そこへ、僕は同級生二人と海辺の病院に実習と海水浴を兼ねて来たのだ。午前中は診察や検査を見学し、心電図を教わり、胃のレントゲン検査を介助する。一度などは、足の小さな腫瘍をとる手術の助手につき、最後に一針ほど皮膚を縫わせて貰って、いたく感動したものだ。もし、僕が外科医になったのなら、ひょっとして『神の手』の記念すべき第一手になったかもしれない。もっとも、後に自分の専門領域となった患者さんも、ここで初めて経験した。リウマチ性の小舞蹈病という、今日の日本では滅多にお目にかかれない病気の女の子が入院していたことを覚えている。

午後は水泳。病院裏の白浜に出て、沖合五〇メートルくらいの岩まで何度も往復した。外海の荒波の下はあくまでも透き通っていて、海草の間に魚が遊んでいた。底まで潜ってサザエをとった。とれたてのウニは焚き火にそのまま入れてほっくりとして、ふうふう言いながら食べた。

宿にあてがわれた古い医師住宅は、晩になると僕たち三人の梁山泊であった。漁師の患者さんからウニとアワビの差し入れがあり、時には見よう見まねで魚を三枚におろして刺身にした。それに『てこね鮫』。海女が船で漁に出る時に作る鰹のなれ鮫である。冷えたビールを飲んで僻地医療の大変さを口にしながらも、脳天気には浜辺の料理を堪能していたものだ。談論風発が過ぎて、水を張らずに空風呂を沸かし、ボヤを起しかけたことすらある。おかげ、貰える筈だったささやかなバイト料が、その修理代として召し上げられてしまった。

惜しむらくは、オールスター・ゲームを境にドラゴンズが連敗を始めたことだ。それに、女っ気が全くなかった。前の方は、ジャイアンツV9のこの時代には毎年の恒例だった。後の方は、もともとこの病院には若いナースが少ない。それに、都会から来た医学生はプレーボーイと思われてか、あこがれではなくて警戒的だったようだ。きっと、連れの同級生のどちらか、あるいは両方が、飢えた象だかシロクマのような顔つきをしていたにちがいない。だから、さざ波のBGMと、満天の星の下を行き交う漁り火の舞台装置だけがロマンテックで、口笛で吹くラ・メールが心なしか空しかった。

ともあれ、なにがしかの若い日々の記憶がこの漁村にはある。だから今、窮状に背を向けてはいけな。ましてや、自分の専門領域のことである。

二十何年か振りに、懐かしい『てこね鮎』の昼食をとった後、まずは病院の患者のコンサルテーションの依頼を受けた。ドーベルマンが言っていたように、小さな病院なのに、ALS、HAM、脊髄小脳変性症と、神経難病の教科書のように、ベッドを並べていた。声をかけたが、目を向けただけで挨拶も返ってこない人もいる。病気で喋れないだけではなく、諦念で心を閉ざしているようでもあった。みな、家庭での面倒は限界に来ており、この病院にやってきたのだ。が、頼られた方は、それに応えることができない。いくらかでもプラスになればと、僕は診断を考え、ここでできそうな治療方針をカルテにコメントする。太めナースが上気したソプラノで看護のコツなどを教えて回っている。

次に、在宅看護ステーションの車で往診に出た。割烹着のような白衣を着た年配ナースが、ひとしきり喋りながら、細い路地をクネクネと器用に白いミニバンを運転する。村の中にも、なぜこんなにいるのかと思うほど、難病の患者さんが待っていた。

最初は、一日中ゴロゴロと寝ているというおじいさんだった。顔に表情がなく、ゆっくりとした動作と肘や膝の固い緊張で診断は簡単だった。最近では、こんなにひどい未治療のパーキンソン病は珍しい。きっとよくなるにちがいないと言いながら、その病院からの投薬を依頼する。

何軒目かの家は、かつては大したものらしく、立派な造りが施されていたが、今はうらぶれていて、屋根がゆがんでいる。患者さんは元網元で、放蕩のため身を持ち崩し、妻に愛想を尽かされて逃げられた。やむなく残されて、この屋敷を一人で守っているという。まさに家守ですと、訳知り職員がつけ加えた。声をかけると、上がって下さいと返事があった。六十過ぎの男性が一人で座っている。なんとか今日のために掃除をしたらしく、散らかってはいなかった。しかし、家の中は藁の匂いがし、ブカブカ畳を歩くと足が沈み、そして埃が舞い上がった。

ボボけた縮緬の座布団に座って病歴を聞く。しっかりと話せて、知的障害はない。が、頬やおとがいの筋肉が細かく震えていて、症状は顔や舌にまで及んでいた。手足の筋肉はやせて力はなく、やっとつかまり歩きができるかどうか。男性だがポインになる女性化乳房。遺伝歴もある。ほぼ診断がついた。球脊髄性筋萎縮症、珍しい病気だ。百年以上も前の明治時代、まだ文明開化が口にされている頃に、母校の川原汎教授が、世界に先駆けて記載した病気である。二〇世紀後半になって、あらためてアメリカから報告された。僕が医者になりたての頃ならば、学会報告ができたくらいだ。ALSに似ているが、進行はゆっくりなので、一人でなんとか生活できている。

今後のケア方針について、太めソプラノや訪問ナースと話しているうちに、脛や腕が痒くなってきた。よく見ると、塵のような小虫が動いている。いろいろの療養上の注意と一緒に、ダニ退治にバルサンで家中を燻蒸するようにも伝えた。

最後の家は新築の総檜づくりだった。この人は、四人の女性にかしずかれていますよと、訳知りがしたり顔で言う。鳥の剥製がずらりと並べられた、凝った欄間のある座敷に通された。真ん中のベッドにALSの患者さんが起き上がって待っていた。難病中の難病である。真珠の養殖で財を成してこの家を建てたが、長くて入念な工事が終わり、やっと新居に入った頃には、足がよろつくようになって発病した。今は歩けず、食事も一人ではとれない。妻と母と、娘に嫁が交代で看病してくれている。趣味で集めた剥製に囲まれて、それを眺めることだけが慰めだという。回らない呂律で呟いた。

「このわしにも翼くれんかな。空を飛んでみたい、もう一度、世の中を見たい・・・」

かつて流行ったフォークソングの歌詞を、まさにこの上ないの実感をもって思い出し、僕は黙ってうな

ずいた。

診察し、その場をためソプラノたちに任せ、別室で家族に病気の見通しについて話をする。手足の筋肉だけでなく、舌や喉の筋肉もなくなり、そのために食事がとれなくなり、話せなくなる。そして、呼吸のための筋肉もなくなり、気管切開と人工呼吸器が必要になること。それをしない場合は、発症して三、四年が寿命などを説明する。こんなに丁寧に診察されたことはない、はじめてきちんと説明してもらったと感謝されたが、医者にとってはつらい役目である。

なぜか、ALSはこの辺りには多い病気だ。人口数千人のこの村で、この日は四人も診た。日本では十万人あたり五人だ。海を一つ隔てた(もともと、二五〇〇キロメートルもあるが…)グアム島の現地人にも、ALSやそれを合併するパーキンソン病などの、奇妙な病気があるという。なにか、関連があるのかもしれないと漠然と思った。何年か後に、この近くで育ったパーキンソン病にALSが加わった患者さんの主治医となり、その病理所見とグアム島のそれとが同じことを発表することになるとは予想もしていなかった。

その日は午後一杯、そのようにして病気を診て回った。出会った患者さんのどの一人もが、僕にとっては新患であり、診断と治療法を真剣なまなざしで求められて、疲れた。若い医者頃、もたらされる期待感のあまりの重圧に、僕はキリストではないのだと、密かに叫んだこともあった。

へとへとになって在宅看護ステーションに戻り、ジュースを一本飲んでお終いであった。当てにしてはなかったが、何の報酬もなかった。そして、つい大学医局員時代のバイト料を心の中で計算してしまった。

数か月して、またその漁村に行った。ところが、運転手役の訳知り職員は免亭中で、助手席に乗り込んできたものの、ただ講釈を垂れるだけが仕事になっていた。結局、往復二五〇キロの運転も僕がした。

往診すると、ゴロゴロじいさんは表情も動作も良くなり、スタスタと歩いて見せてくれた。診断と治療方針は当たり、まさに薬石は功を奏したようだ。これは嬉しいことである。家守さんの病状もブカブカ畳の家も変わらなかったが、不自由な体でジュースを買い、縁の欠けたコップを添えて待っていてくれた。これも、医者冥利に尽きる。

真珠王は悪くなっていた。もはや、起き上がることはできなかった。かすれるえる声で、自分の病気はどうなるかを聞いてきた。僕は重い気分で、人工呼吸器の細かいことなどを説明した。

新しい患者さんも増えていた。デューティにしろ、ボランティアにしろ、患者さんを受けとめばならない。見通しの悪い病気に対してなにが出来るかと悩むのは同じだった。帰りしな、光る頭の汗を拭きながら、訳知りが言った。

「やあ、ボランティアって、気持ちいいですな。本当に充実感がありますな」

そうだなとつぶやき、多少の違和感を胸にしながら、僕は一二五キロの帰り道に向かってアクセルを踏んだ。

意義はある。充実感もある。しかし、遠すぎる訪問診療を、一時のパッションで終わらせるのではなく、ちゃんと続けるのには、きちんとしなければならないこともあった。折から汚職事件があった。李下に冠を正さないためには、このような病院外の活動はしない方がよいのだが、既に瓜田ならぬ漁村に履を踏み入れている。訪問診療を止めると、途方に暮れる難病の患者さんを、まさに島流し同然に残すことになる。勤務先の院長に相談し、誤解なきよう、訪問ステーションからの依頼状による、当院からの往診の形をとることにした。

そうして六年が経過した。

ドーベルマン婦長はよその病院に転勤になり、その個性が巻き起こすつむじ風が、時たま噂の気流で届いてくる。訳知り職員は昂じたボランティア精神で「理想の障害者施設」を設立したが、四、五年で

職場で体調を崩し、命まで捧げてしまった。太めナースは中堅職員として、ソプラノで患者さんに声をかけながら、相変わらず僕の病院に勤めている。もっとも、配置替えがあり、太平洋に突き出た漁村に訪れることはない。

患者さんも変わっていった。ALSの真珠王は、結局、人工呼吸器を選択せずに、一晩中家族に体をさすってもらいながら昇天した。ゴロゴロじいさんのパーキンソン病はうまくコントロールできているが、付き添っていたおばあさんが先に呆けてしまい、そちらの面倒が大変になっている。

家守さんは、ある晩、家の土間でバランスを崩して動けなくなり、壁と家具の間のくぼみに挟まったまま、中途半端な姿勢で真冬の夜を過ごした。翌日、訪問ナースが見つけた時は、消耗し尽くしていた。体力的には限界で、一人で屋敷を守ることはもうできないし、網元のプライドだけで支えてきた気力も弱くなってきた。僕はドクター・ストップのタオルを投げ、自分の病院に措置入院してもらった。だから、今ではダニの痒みを怖れずに、ゆっくりと彼の診察ができる。

何人かの患者さんもこちらの病院に入院の上、診断を確定し、治療法や療養のオリエンテーションをつけてあげた。残念ながら、先行きが悪い難病が少なくなかったが、退院して、帰って行った。亡くなった人もいる。入院のままなら、もっと長く頑張れたのにとはいはする。だが、医療状況は貧しくとも、生まれ故郷の漁村で最後の日々を過ごすというのも、それはその人その人の選択の結果であった。

今でも、数か月おきに海辺の在宅訪問ステーションから電話がある。またその時期になったのかと言いながら、朝早く、自宅からは長丁場のドライブで往診に行く。ドーベルマンの押しつけボランティアはいささか迷惑であったにしろ、今はこれは自分の意志によるささやかな善行だと思っている。もっとも、学生時代に空炊きした風呂釜の修理代も、差し入れのアワビやウニもとくに償却しているとは思いはするが……。

診察を終え、夕方、宮沢賢治の『雨ニモ負ケズ』の一節を心の中で呟きながら、三時間かけて名古屋に帰る。

「…東ニ病氣ノコドモアレバ行ッテ看病シテヤリ、…南ニ死ニソウナ人アレバ行ッテコハガラナクテモイイトイヒ…」

次に、今度は声を出して呟き、ハンドルを心持ち強く握る。

「東ニ難病ノ人アレバ、…。今日はドーベルマン日和であった」